光と風と水をまとって

第11回

びょういんあーとぷろじぇくと2016

第10回「ひかりの庭」展／独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター

びょういんあーとぷろじぇくとに寄せて

人は誰もが鋭敏な「感受する主体」ですが、ただ「治療される身体」としてのみ扱われるとき、言いようのない息苦しさを感じます。
治療機能に特化しがちな病院の空間ですが、そこは同時に患者や医療スタッフ達の日々の生活の場でもあるのです。こうした空間課題を背景に、最近になって日本でも、医療の現場に芸術を取り入れ、患者の癒やしや治療に生かす取り組みが広がり始めました。

北海道では、2008年から札幌ライラック病院で「びょういんあーとぷろじぇくと」の活動が始まりました。
代表の日野間尋子のコーディネートで、アート作品の設置のほか、コンサート、レクチャー、ダンスなど、毎年のように分野と手法を更新しながら、病院をコミュニティーのひとつとして捉え、アートの力で働きかける取り組みが継続されています。

空間にアートがあることで、「気持ちが明るくなった」、「病院の中での会話が増えた」といった声も寄せられるようになりました。

最近では、札幌ライラック病院以外にも活動の場が拡がり、2015年には北海道がんセンターでも展示＝写真左＝や合唱を行いました。そして2016年、第11回目となる本展では、札幌の天使病院、市立札幌病院が新たに会場に参加しています。

壁や天井に配されたカラフルでユーモラスなアートの数々は、病院の人々を「感受する主体」として呼び覚まし、改めて、自分自身や世界と出会わせてくれているかのようです。そして、この場所は「人間の空間」であることを静かに宣言してくれています。

北海道大学大学院国際広報メディア観光学院　加藤康子

Profile

日野間 尋子 Hinoma Hiroko

美術家。びょういんあーとぷろじぇくと代表。
1986年より個展、グループ展(札幌、東京)などで作品を発表。2000から2006年まで、欧州のアートプロジェクトに参加。芸術療法士（音楽/美術）との出会い、共同制作を通して、臨床での“アートとケア”“アートと医療”それぞれの接点を求めるようになる。2008年、「びょういんあーとぷろじぇくと」を立上げる。富良野あさひ郷北の峯学園 講師。札幌花園病院非常勤講師。日本美術家連盟会員。臨床美術士（臨床美術協会）。園芸療法士（日本園芸療法普及協会）。

ホスピタルアート

おだこうじ（緩和ケア医/一級建築士）

私たちの国では昔から「見立てる」ことをしてきました。そこにそのものはないけれども、別のものを「…のように見せる」。それは代用の範疇を超え、ときに「粋」を見出したりします。
本当はないのだけれども、ある。私はこの「見立て」に出会うと、虚構ゆえの美しさを感じます。「約束ごと」でしかないはかなさは、金やダイヤモンドのような「永遠に存在する信頼感」とは対極にありながら、でも、社会や生活、一人ひとりのいのちを考えるとき、より自然で（ものごとの本質に素直に従っていて）納得のいく存在形態のように思います。

ホスピタルアートは虚構の文化のひとつです。光も風も水もそこにはなく、そこにある「ように見せる」ものであり（もちろん光、風、水を使ってもよいのですが、その場合は水、風、光は道具と化して別の何かを「見立て」ようとするのでしょう）、そして「見る」側も、仮の姿として病院に暮らし（あるいは通い）、病院の中にあるものを、本来の自分が接するであろう何かに「見立て」ようとしている人々です。
病院にいる人には、外の世界に戻れる人ばかりでなく、もう出られない人もいます。病院にいることを実存的にとらえ続ける限り、癒しは不平等にしか訪れません。しかしホスピタルアートの生み出す光と風と水は、どちらの人にも平等に降り注ぐことができるでしょう。いのちのはかなさが際立つ病院生活に必要な癒しは、実体を受容しつつも虚構の豊かさに心躍らせる仕掛けであり、ホスピタルアートがその力を十分に発揮することを期待しています。

今年は、札幌で開かれるいくつかの学会イベントと連携して、市立札幌病院でも“びょういんあーとぷろじぇくと”が行われることになりました。制作には、スタッフの方々に加えて医師・看護師・薬剤師・栄養士・作業療法士・医療秘書・ボランティアそして患者の方々が参加しました。お時間ありましたら、どうぞ当院3階“ジェントル・ストリート”にお立ち寄りください。光が差し込み、風が吹き、水が潤すさまをご覧ください。

医療法人北志会　札幌ライラック病院
理事長　志田 勇人

絆 ～アートと病院をつなぐもの

当院は今年、大きな転換期を迎え、職員一丸となって地域における病院使命を果たすべく心新たに歩みはじめました。患者様の「安心」「信頼」「満足」を目指し、日々診療を行なっています。外来に展示された色鮮やかで心がワクワク踊るようなアートは、毎回、目を楽しませてくれるだけではなく、日々の診療における患者さんと医療者の潤滑油となり、コミュニケーションの一翼を担ってくれていると実感します。
2008年秋に当院の外来ロビーから小さく息吹をあげたアートの芽が、成長を続け、大きく花開き、更なる広がりを見せていることを大変喜ばしく感じるとともに、これから先も医療とアートが強い絆で結びつき、患者様の「安心」「信頼」「満足」に還元されていくことを切に願っております。

Photo by Ueshima
札幌ライラック病院